

文化遺産保存の場における記憶のダイナミクス

—— 社会学的記憶論の再検討を通じて ——

木村至聖

はじめに——文化遺産における記憶の保存

近年わが国では、文化遺産をめぐる記憶の保存・伝承が社会的関心を集めている。それはたとえばユネスコの世界遺産への関心の高まりや、炭鉱や工場、発電所などの近代化・産業遺産への注目にもみられる。また、1996年の文化財保護法改正による登録制度⁽¹⁾の導入は、我々にとって比較的身近な記憶を喚起する明治時代以降の対象をも文化遺産とすることを可能にした。

だがこの文化遺産によって記憶が保存されるという社会的通念に対して、社会学の内部からは批判的な論点がいくつか提起されている。まず第一に挙げられるのは、ジョン・アーリなどにみられる「遺産産業」への批判である。つまり今日では、文化遺産は観光資源として「観光のまなざし」(Urry 1990=1995)にさらされており、「遺産産業」の軽薄な商業主義と消費者中心主義による「偽物の歴史」は「本当の歴史」を歪めてしまう(Hewison 1987: 98)。また、保存される対象も必ずしも歴史的に重要であるために選り出されるのではなく、その規模の大きさ、(観光客にとっての)魅力、そして利用可能性(availability)などを基準として選ばれる(Barthel 1996: 9)。この観点からすると、文化遺産に記憶を保存するといっても、その記憶は商業主義によって歪められ、やがて消費されてしまうものとして解釈される。

もう一つの論点として、文化遺産を成り立たせる制度そのものが、すでにそこで保存される記憶に対して構造的に働き、限定を加えてしまうということが挙げられる。たとえばヘンリエッタ・リッチは博物館を、モノの展示=表象によって「異文化」を構築する戦略

⁽¹⁾ 従来の文化財「指定」制度は、行政組織がその文化財に対する価値を認め、その保護管理に際して責任を負うものであった。1996年に、この指定制度を補完する目的で導入された「登録」制度は、主に明治以降の近代建築物を届出に基づいて登録するものである。その対象の維持管理の責任は所有者に課される代わりに、活用に関する規制も緩やかである。2006年8月現在5千件を超える(文化庁調べ)。

的な空間として特徴づけている (Lidchi 1997: 153-4)。また荻野昌弘は、文化遺産＝博物館的な秩序においては、モノはその原コンテクストから引きはがされ、学術的に体系化された無味無臭の空間（ガラスケースのような）に位置づけ直されることによって、それにまつわる固有の経験や記憶が抽象化され、独自の「臭い」を失ってしまうと指摘している (荻野2002: 6-7)。

これらの批判は文化遺産という制度の見逃されがちな問題点を的確に指摘している。だがここでは議論をもう一步先に進めるために、次のような問題を提起したい。すなわち、この二つの批判はいずれも保存される文化遺産の空間的・意味論的再構成によって、それに付随する記憶も一方的に変形・操作されてしまうものとして捉えている。つまりここでは、批判的な立場からにせよ、モノの構成と記憶の構築が同一の次元で捉えられてしまっているのである。たしかに、過去の「想起」にはほとんど必然的に記憶の再構成がつきまとう。しかし、モノの可塑性と同様に記憶もまた構成されると了解してしまうことには、ともすると記憶を政治的・商業的な道具として切り詰め、かつて実際にあった出来事そのものの重みを失わせてしまう危険が伴うのではないだろうか⁽²⁾。

そこで、我々はこのようなモノと記憶の構成的な関係にある程度は認めつつも、あえてそこに収まり切らない関係について論じたい。指摘しておきたいのは、我々が保存されたモノに直接会おうとき、それはたとえガラスケースのなかに展示されようとも、いかに意味づけられようともそこには収まりきらないような「説得力」「迫力」を、モノが持つことがあるということである。それはとりわけ建築物のような、その「場所」に根づいたモノについて言えるだろう。つまり、それらは地霊 (ゲニウス・ロキ) のようなものを帯びているのではないだろうか。

本稿では、このモノが主体の能動的な意味構成を超えて我々に働きかけてくる可能性を論じるために、意志的記憶 (*la mémoire volontaire*) と無意志的記憶 (*la mémoire involontaire*) という二つの記憶概念を導入する。前者の意志的記憶とは、主体がモノや言語の構成によって能動的に構築しうる記憶であり、また後者の無意志的記憶は、意志的記憶の構成には収まり切らない残余として存在し、直接的には構成したり言語化したりすることができず、モノから与えられる印象などのかたちで受動的にのみ喚起されうる記憶とする⁽³⁾。

⁽²⁾ もっともアーリは、観光客たちはそうした遺産を通してしか、過去の姿をとらえることはできないのであり、「一連の同じ対象へまなざしを向けながらも、けっこう異なった方法でそれを読み解いている」(Urry 1990=1995: 199-200) と指摘する。リッチもまた博物館において鑑賞者がその展示を能動的にデコードする可能性について論じている (Lidchi 1997: 166)。しかしここでの問題は、そのような多様な読みの可能性自体が記憶の意図的な構成可能性に結びついていることである。

⁽³⁾ この意志的／無意志的記憶という概念は、後述するようにベンヤミンの用法に多くを拠っている。

こうした二つの記憶について論じる意義としては、一つにははじめにもみたように文化遺産への社会的関心が高まり、それにまつわる記憶が歴史的に固定化・定式化されていくなか、なおも不安定な状態にある（追悼や慰霊、記念などにおける）死者についての記憶やトラウマ的体験の記憶などをいかに扱っていくべきかという困難な問いに向き合うということが挙げられる。さらに、本稿が提示する意図的に構成することのできない無意志的記憶という概念は、ともすると過去を目的に合わせて操作することができるという極端な記憶の道具主義を乗り越えていくためのヒントになると考えられるのである。

まずこれら二つの記憶概念を導入する前提として、従来の社会学的記憶論の検討から始める。第1章では社会学的記憶論の起源とも言えるアルヴァックス（そしてその師ベルクソン）の記憶論について触れ、それが今日歴史学や社会学においても一般的になっている構築主義的な記憶論にいかに関承されているのか、そしてそれがいかなる問題点をはらむのかについて概観する。第2章では、この問題点を乗り越えるためにベンヤミンの「記憶痕跡」の概念を参照し、冒頭でみた意志的記憶と無意志的記憶という区別を再定式化する。第3章では、無意志的記憶という概念を実際にモノに適用するために、現代日本の「廃墟ブーム」を事例として挙げて検討する。第4章では、以上の議論を総合して、文化遺産において無意志的記憶というものがいかに論じ得るのか／得ないのかを明らかにする。

1 社会学的記憶論の再検討

1-1 社会学的記憶論の起源——ベルクソンからアルヴァックスへ

社会学における記憶研究の起源はモーリス・アルヴァックスの『記憶の社会的枠』（1925）を中心とする諸研究に遡る。だが彼の社会学的な記憶研究が注目されるようになったのは、1980年代になってからだった。後述するように、アルヴァックスは記憶の基盤として特定の社会集団を前提しており、これが1980年代の多文化主義の潮流のなかで再発見されたのである（Olick & Robbins 1998: 107）。

アルヴァックスの記憶論は、哲学者アンリ・ベルクソンの記憶論を批判的に継承するというかたちで大きな影響を受けている。ベルクソンは『物質と記憶』（1896）をはじめとするいくつかの著作のなかで記憶について論じているが、まず彼にとって記憶とは「過去全体」を意味するものであった。過去はすでになくなってしまったものではなく、実は存在しないのは現在の方である。過去は絶え間なく増大し、自動的に保存されていくが、脳はこのほとんどを無意識に押し込め、現在に有用なものだけを意識に導き入れる。この無

意識に保存されたものを、ベルクソンは「純粹記憶」と名付け、そこから現在において知覚される記憶を「イメージ」と呼ぶ。純粹記憶は持続という分割不可能な流れであり、それはイメージの数的な和として捉えることはできない。そして私たちはこの無意識に保存された記憶の全内容と、意識下でイメージ化された記憶の両極の間を、精神の緊張の度合に従って揺れ動いているのである (Bergson 1896=1936)。

アルヴァックスが記憶について初めて本格的に論じた『記憶の社会的枠』は、前半ではベルクソンの『物質と記憶』、後半ではエミール・デュルケームのとりわけ「個人表象と集合表象」(Durkheim 1898=1985)を前提として議論が展開されている⁽⁴⁾。アルヴァックスの記憶論がベルクソンから受け継いだものとして、ここでとくに注目したいのは、記憶が知覚の要素であるという観点である。なぜなら、ベルクソンが『物質と記憶』というタイトルで示した通り、知覚はその両者(モノと記憶)を結びつける概念として提起されているからである。ベルクソンが記憶を含まない知覚は存在しないとしたように (Bergson 1896=1936)、アルヴァックスは記憶が現在の合理的活動 (*l'activité rationnelle*) や認識にとって重要や役割を果たすと論じている (Halbwachs 1925)。

その一方で、アルヴァックスはベルクソンの記憶のモデルがあまりに直感的であり、「私の意識のなかに閉じこもって」おり、「私のとは違う思考を持った存在」との関係の説明できないと批判している (Halbwachs 1950=1989: 112)。アルヴァックスの第一の関心は、いかにしてこうした他者どうしの知覚の同時性が達成されるか、ということにあったのである。そこで彼はデュルケームの集合表象論に倣い、集合的記憶という個人の外部にある非人格的な持続こそが、個人の持続にその基礎(社会的枠)や実質を与えたと考えた。だがここで彼が想定する非人格的な集合表象としての記憶は、デュルケームが用いたような意味での普遍的で単一の社会的事実ではない。つまり、「すべての集合的記憶は空間においても時間においても有限な集団に支えられている」(Halbwachs 1950=1989: 94)として彼はその多元性を強調したのである。

1-2 「記憶」の問題化

今日の社会学的記憶論においても一般的になっている構築主義的な記憶モデルは、前節でみたアルヴァックスの記憶論に多くを依っている。松浦雄介によれば、社会学における構築主義的記憶論は第一に現在主義(記憶はつねに現在の観点から再構成される)、第二

⁽⁴⁾ だがここでデュルケームは、あくまで記憶は個人的・心理的な表象であり、社会学の対象ではないと考えている。

に共同想起（集会的記憶論と個人的記憶の社会的フレーム論）という二点を前提としているが、このいずれの特徴もすでにアルヴァックスの記憶論に見出せるのである（松浦 2005: 29-30, 235）。

アルヴァックスの記憶論を現代的なかたちで発展させた代表的研究として、ピエール・ノラが編纂した『記憶の場』（1984）がある。ノラによれば、原始社会における〈記憶〉は「真の、社会的な、ありのままの記憶」であり、それは「生命であり、生ける集団によって担われる」ものであった（Nora 1984a=2002: 30-1）。それに対して、〈歴史〉は「もはや存在しないものの再構成」として出現し、〈記憶〉から「聖性を奪」い、「俗化」していった（Nora 1984a=2002: 31-2）。しかし逆説的なことに、近代において記憶の基盤としてのゲマインシャフト的共同体が解体したのに伴い、この「自然な記憶はもう存在しないという意識」（Nora 1984a=2002: 37）が、記憶を「記憶の場」という装置を通して再び聖化したのである。

ここでノラは「こんにち、記憶と呼ばれるものはすべて、記憶ではなく、すでに歴史に属している」と断った上で、〈真の記憶〉と〈歴史化された記憶〉という区別を導入する（Nora 1984a=2002: 38）。前者は動作や習慣、身体や本能のなかに刷り込まれているのに対し、後者は「記録としての記憶」であり、とりわけモノや明白なイメージに媒介された記憶である（Nora 1984a=2002: 39）。そしてこの〈歴史化された記憶〉を作り出すための記録や遺跡、痕跡の保存はやがて「強迫観念」となり、あらゆる記憶を「物質化」をしようとする制度として現われ（Nora 1984a=2002: 40）、さらに「個々の義務として内面化」される（Nora 1984a=2002: 41-2）。

だがこうしたノラの記憶論において中心的に論じられているのは〈真の記憶〉ではなく、〈歴史化された記憶〉がいかにかに形成されるかであり、それは出来事そのものの復活ではなく、取舍選択の結果再構成された表象として立ち現れる記憶なのである。このような記憶論は、歴史を「過去にあったことそのもの」と捉えるナイーブな歴史観からは距離をおき、現在という時点における歴史記述・認識（「想起」）のされ方をメタ・レベルで捉え、省察を加えるものである。ここでは、記憶が現在という時点において道具的・合目的に再構成されると捉える点で、広い意味で構築主義的といえる記憶論が前提とされている。

社会学においてこうした記憶モデルは、たとえば戦争や災害のような死者に関わる出来事をいかにかに記憶するかという問題（今井 2002）などに適用される。また、記憶を物語るという行為によるアイデンティティ形成を問題にした研究（片桐 2003）にもみられるように、記憶の構築は一回的な出来事ではなく、自己と他者との相互行為を通して絶えず構築され続けるものと考えられる。歴史学の小関隆もまた、「公共の記憶は、自らとは異なる、し

ばしば対立する個の記憶や集合的記憶……を、様々なレベルのヘゲモニーを通じて、時には動員・利用・篡奪し、時には排除・抑圧することで構築される」(小関 1999: 8)としてそのダイナミクスとアイデンティティ形成における役割を説明している。

1-3 構築主義的記憶モデルの問題点

しかしこうした構築主義的記憶論や「記憶の政治学」に対しては、主に以下のような批判がなされている。第一に、構築主義が記憶を現在において再構成されるべきものと捉えている(現在主義)のであれば、その結果として立ち現われる特定の記憶の形はいかにして決定されているのかが説明できない(内田 2002: 49, 松浦 2005: 31)。第二に、構築主義的記憶論が、あくまで狭義の記憶しか扱っていない、つまりそれだけでは語れない記憶がある。それはたとえば、従軍慰安婦やホロコーストなどのトラウマ的被害体験の記憶について論じる際にしばしば提起されるような〈語りえぬもの〉(高橋 1995, 岡 2000)であったり、身体に刷り込まれた言語化できない記憶であったりする。

これらの問題はいずれも、記憶を合目的的に再構成しようとする主体の意図を超えたところに存在している。つまり、構成されるべき記憶のヘゲモニー争いは必ずしも主体の意図通りの結果を導くわけではなく、また語ることでできない記憶の作用もまた主体の意図の外にある。ここで改めてアルヴァックスの記憶論を振り返ってみよう。アルヴァックスは現在における認識・行為と記憶を結び付ける点でベルクソンに倣いながら、デュルケームの集合表象論を修正して応用することによって集合的記憶という概念を編み出したが、そこで彼は「身体と緊密に結びつい」た「印象」のような概念を「われわれを外へ出させることはない」、つまり集合的=社会学的に論じることができないという理由で意図的に排除しているのである(Halbwachs 1950=1989: 161)。

しかし、この「印象」としての記憶は、我々が現在直面している構築主義的な記憶論の限界を乗り越えていく上で、大きな示唆を与えてはくれないだろうか。つまり、本稿が論じようとしていた、モノによって主体の意図とは関わりなく喚起されるような、あるいは言語化できない記憶について考察する際、こうした抽象的で一見社会性を持たないような「印象」としての記憶の問題を避けて通ることはできないのである。そしてその記憶は、冒頭でも触れたような、主体の構成意図や意味的な「読み解き」を超えたモノの説得力を理解するための重要な鍵ともなっている。そこで次章では、アルヴァックスが排除してしまった「印象」の問題を救い出す可能性として、ヴァルター・ベンヤミンの記憶論に注目してみたい。

2 ベンヤミンの記憶論

2-1 ベンヤミンの記憶論——近代社会における経験と記憶

ベンヤミンは『ボードレールにおけるいくつかのモチーフについて』（1939）のなかで、ベルクソンをはじめとする「生の哲学」について、「それらは社会における人間の生活から出発することをしなかった」とし、とりわけベルクソンは「大工業時代の不毛で幻惑的な経験」に肉薄するのを避けたと指摘している（Benjamin 1939=1995:421-2）。

このように、ベンヤミンはベルクソンの記憶／経験のモデルもまた不十分なものと考えたが、彼はそれを完全に斥けてしまうことはしなかった。まず彼はベルクソンの経験のモデルを、「追想において厳格に固定される個々の事実よりも、堆積されて記憶のなかで合流する、意識されないことの多いデータから形成される」ものと位置づけた上で、それを実地に検証したのものとしてブルーストの『失われた時を求めて』（1913-27）を挙げている。すなわち、この作品の有名な場面——マドレーヌの味が主人公に思いがけず幼年時代の記憶を喚起させる——においては、意識の支配下にあつて理性的に構成される「意識的追想」とは異なる、いわば「無意志的記憶」というべき概念が示されているのである⁽⁵⁾。

そしてベンヤミンは、ここで挙げた「意識的追想」と「無意志的記憶」の相関関係を明らかにするために、フロイトの論考『快感原則の彼岸』（1920）を参照する。フロイトは、外界からくる刺激の知覚は人間の知覚-意識システムに長期的な痕跡を残し、これが記憶の基礎になると仮定する（Freud 1920=1996: 142）。しかし、こうした痕跡がつねに意識されているのは、新しい刺激を受け取るシステムの機能が著しく制限されてしまう。そこでフロイトは「意識は記憶の痕跡の代わりに発生する」（Freud 1920=1996: 142-3、傍点は原著では隔字体）という結論に達する。すると、記憶の基礎となるべき「痕跡」は意識とは別の体系によって受容されなければならない。これがフロイトにおける無意識のシステムであり、ブルーストにおける「無意志的記憶」はこの記憶痕跡に対応する（Benjamin 1939=1995: 427）。

ここでベンヤミンは、フロイトが意識を刺激（とりわけ有機体の受容能力を超えた不快な刺激）に対する防御として捉えていた（Freud 1920=1996: 149）ことに注目する。その

⁽⁵⁾ しかしベンヤミンによれば、ベルクソンの「純粹記憶」の場合、「生の流れを觀照的態度でまざまざと思い描くことへ向かうかどうかは、自由な決断の問題」として扱われており、その点でブルーストにおける「無意志的記憶」とは異なっている（Benjamin 1939=1995: 422-3）。

ような刺激、すなわち「ショック」は、そのままでは精神的な外傷（トラウマ）の作用を及ぼす恐れがある。そのため、「ショック」は意識化・意味づけされることによって受容されるのである⁽⁶⁾。ベンヤミンがとりわけこの「ショック」に注目したのは理由がある。つまり彼によれば、近代社会は大都市の交通、非人間的な群集、新聞や写真、工場労働などによって、いわゆる「生の哲学」が取り扱うような「持続」としての「経験」は遮断され、分割されて「ショック（体験）」として経験されるようになる時代であった。そこで、近代人は「出来事の内容の完全性を犠牲にして、その出来事に、それが意識のなかで占めるべき正確な時間的位置を指定する」（Benjamin 1939=1995 :430）こと、すなわちそれを「（意識的）追想」の対象として再構成することによって、その過剰な刺激を緩和しようとしたのである。アルヴァックスが論じた記憶はまさにこの記憶のことであり、それはまたノラのいう〈歴史化された記憶〉とも通底するものである。

このように、ベンヤミンはアルヴァックスと同様に、記憶と経験を結び合わせるベルクソンの記憶論に倣いながらも、近代社会における「経験」の質の変化に注目し、それを持続としての「経験」と分割された「ショック（体験）」とに区別することによって、アルヴァックスが排除してしまった、言語化されえないような「印象」の問題を救い出すのである。

2-2 社会学的対象としての「記憶痕跡」

だがまだ大きな問題が一つ残されている。それは、ベンヤミンが再び光を当てたベルクソンの記憶、意識的な追想の対象とはならない記憶を、社会学的に論じる意義はどこにあるのかという問題である。そもそもアルヴァックスはこのような記憶を集会的・社会学的に論じることができないという理由で排除したのであり、ベンヤミン自身もまたそれが近代社会の経験の様態に適合していないと批判している。

そこで、なぜベンヤミンがあえてベルクソンの記憶論を（批判しつつも）掘り起こしたのか考えてみたい。それは彼がベルクソンの論じた意識されない記憶もまた近代社会を論じる上で欠かせないものであり、かつ近代社会という文脈のなかで扱うことが可能であると考えたからではないだろうか。このような解釈をするための手がかりは、先にみた「記憶痕跡」という概念にある。以下の引用にみられるように、ベンヤミンの一連の作品群は、

⁽⁶⁾ これをベンヤミンは出来事を「意識的な追想のファイル」に「編入」すること（Benjamin 1939=1995 :429）と表現する。

歴史に回収されない過去の痕跡を蒐集し、そこから弁証法的にユートピアを創り出す作業であった。

どの時代にとっても次の時代はさまざまな形象をとって夢の中で現れる。だが、この夢の中で次の時代は根源の歴史の要素、つまりは階級なき社会のさまざまな要素とむすびついて現れる。階級なき社会についてのさまざまな経験は集団の無意識の中に保存されていて、こうした経験こそが、新しきものと深く交わることによってユートピアを生み出す。このユートピアは、永く残る建築物からつかの間の流行にいたるまでの、人間の生活の実にさまざまな形状のうちにその痕跡をとどめている。(Benjamin 1983=[1993] 2003: 8)

この「痕跡」は、ベンヤミンにおいては「永く残る建築物からつかの間の流行にいたるまで」様々なところでみつけることができる。そしてまさにこの「痕跡」のなかにこそ、歴史として意識化されてこなかった記憶が無意識のうちに保存されているのであり、パサージュ、博物館といった近代に由来する経験は、この無意識の記憶を集合的に喚起するものとして働いたと考えられるのである。

ここで我々は本稿冒頭で前もって定式化しておいた意志的記憶と無意志的記憶の区別に至るのである。ベンヤミンによればモノにはそれが経験した出来事、時の流れなどの痕跡が刻み付けられているのであり、そこには人によって構成された意志的記憶に制限されない記憶が、「記憶痕跡」として潜在的に残存し、時折無意志的記憶として喚起されることがあるのである。

だがたしかに、意味づけられないまま、ただ主観的な印象としてのみ喚起される無意志的記憶は、アルヴァックスの提示したような社会的な枠によって固定されておらず、そのため社会的・集合的に共有することはできない、と考えるのが妥当である。しかし、文化遺産のようにモノを媒介にして記憶を保存しようとする場合は、その限りではない。ノラはゲマインシャフト的な共同体が解体したことによって「自然な記憶」が消滅したと論じ、アルヴァックスは集合的記憶の基盤として同様の集団を前提していたが、「記憶痕跡」としてのモノもまた記憶の基盤として働くのである。

ここで我々が共有できるのはあらかじめ主体の側で構成されてしまっている意志的記憶ではなく、外在的な「記憶痕跡」としてのモノである。そこから得られる「印象」は主観的なものであり、必ずしも共有できるとは限らない。だが重要なのは、政治的・商業的な主体の意図によって構成された意志的記憶には収まり切らないような迫真性を持った無意志的記憶が、ここに提示され得るということである。もっともその先は再び何らかの形で意志的記憶として構成されていくかもしれないが、この二種類の記憶について論じない限

り、文化遺産において保存される記憶が主体の構成的意図を超えて説得力を持ってくるといふ記憶のダイナミクスを理解することはできない。この意味で、我々は現在の時点において再構成される意志的記憶を社会的に論じる必要があるのと同様に、この構成されることのない無意志的記憶についても並行して論じる必要があるのである。

3 「廃墟ブーム」にみる無意志的記憶のあらわれ

それでは、これまで論じてきた無意志的記憶という概念は、現代社会においていかに論じられるのだろうか。今日文化遺産はほとんどの場合、意志的記憶を通じて論じられてしまう。それは、そもそも文化遺産という価値づけ自体が、様々な可能性に開かれているはずのモノに特定の一つの価値を与えるという点⁽⁷⁾で、能動的かつ構成的に形づくられる意志的記憶ときわめて親和的な関係にあることにも拠っている。しかし、実際我々がモノとしての文化遺産と出会うとき、そこに言語化できない無意志的記憶が喚起されうるといふことは本稿冒頭でもみた通りである。そこで、ここでは歴史的に形成された文化遺産という価値づけを一旦括弧に入れた上で、モノと無意志的記憶の関わりを論じるための補助線として、現代日本の「廃墟ブーム」を参照したい。

1990年代末から今世紀初めにかけて、日本では「廃墟ブーム」⁽⁸⁾と呼ばれる現象がみられた。これは、主にバブル崩壊以後に放棄されたホテルや病院、遊園地やマンション、アパートなどの廃墟を紹介する写真集や書籍が集中して出版され（小林 1998, 2001, 栗原 2002, 2003, 中田 2002, 2005）、インターネットでも廃墟に関する情報交換が活発に行われた⁽⁹⁾現象である。これによって「廃墟趣味」は一種のサブカルチャーとして認知されるようになったが、その一方で、実際に廃墟とされる建築物に不法に侵入し、探索する人々が新聞やテレビのニュースで取り上げられ、社会問題としても扱われた。

これらの廃墟サイトや出版されている廃墟写真集をみてすぐに気づく特徴は、扱われて

⁽⁷⁾ このような文化遺産的な価値づけのシステムが歴史的に形成されてきた過程については、別稿で詳しく論じた（木村 2007）。

⁽⁸⁾ 「ヒットしても5千部がせいぜい」といわれる写真集の中で、小林伸一郎の『廃墟遊戯』（1998）は1万6千部という異例の部数を売り上げた（『AERA』2001年11月5日号）。また、ここで論じている「廃墟ブーム」はあくまで日本における現象であるが、英米においても1980年代以降の産業構造の転換や市場原理主義の導入によって工業施設や高層ビルなどの廃墟が増加し、それらをノスタルジックに見る傾向が強まっていることが指摘されている（Vergara 1999, Edensor 2005）。

⁽⁹⁾ 廃墟の情報を扱ったウェブサイトとして、『廃墟の歩き方』の著者である栗原亨による人気廃墟サイト『廃墟Explorer』（<http://www2.ttcn.ne.jp/~hexplorer/>、2006年12月10日アクセス可能）などが挙げられる。こうしたサイトは他にも数多くあり、2002年6月から、検索サイトYAHOO! Japanには「廃墟」のカテゴリーが設けられている。

いる廃墟がきわめて「新しい」ものであるということである。これは、18世紀ヨーロッパにおいてもみられた廃墟趣味⁽¹⁰⁾とは明らかに異なる特徴を示している。つまり、18世紀の文人たちがローマ遺跡のような古代の廃墟を眺めて遠い過去に思いを馳せていたのに対し、現代の廃墟愛好家たちはきわめて「最近のこと」を懐かしむのであり、しかもその「新しい」廃墟は大抵の場合、すぐにでも取り壊される運命にある。それらはほとんどの場合「保存」されることはない。また第二に挙げられる特徴は、廃墟が新しいというだけでなく、そのまだ人間の体温が残っているような生々しい廃墟を前にして、そこにあった他人の「物語」を想像している点である。たとえば、『廃墟の歩き方』(2002)では、廃墟に残されたカレンダーからその廃墟化の経緯を推測したり、そこにある遺物から当時の住人の生活を想像したりしている。

ここに漂う奇妙な喪失感からわかることは、彼らが単に廃墟の荒廃そのものを見ているだけでなく、それらがまだ「新しく」、人の体温が残っているにもかかわらず、それが失われてしまったという感覚に襲われているということである。つまりそれらは本来近く感じられるはずの対象なのにもかかわらず、18世紀の人々が古代ローマの廃墟をみたときのような距離感を感じさせる「記憶痕跡」となってしまうのである。それは目の前の廃墟が、自分の過去の経験にぴったりと重なりあうためではなく、重ね合わせるべき記憶を持ち合わせていないという喪失感を喚起するからこそ、彼らの心に無意志的記憶として喚起されるのではないだろうか。ここでは主体は漠然とした過去の印象、あるいは感情として喚起される失われた過去に身を任せ、それを再構成したり、社会的に意味づけようとは必ずしもしない。そこではいわば意味を経由することなしに、そのモノ（記憶痕跡）に刻まれた過去が直接迫ってくる体験が起こっているのである。

だがまた同時に、この「廃墟ブーム」においてさえも、無意志的記憶はつねに意志的記憶に取り込まれようとしている。たとえば、「廃墟ブーム」の火付け役といわれる長崎県の端島（通称「軍艦島」）は、日本で最も古い時期（大正時代）の鉄筋コンクリートの高層集合住宅が残っているため、地元では観光資源としての活用が試みられており、世界遺

⁽¹⁰⁾ 18世紀西欧社会では、ピクチャレスクという美の観念を背景として、イギリスを中心に廃墟を描いた絵画や実際に廃墟をオブジェとして配置した庭園などが流行するという現象が起こった。富永茂樹は当時の廃墟趣味の感受性について、「時間というものが過ぎ去ってもとには戻らないことをひとに示すがゆえに、廃墟は憂鬱な気分をかもし出す」（富永 1996: 31）とし、それと同時に「苦惱（利益、情念、悪徳…）にみちた生活世界から孤絶し解放されることによって、自己自身を見いだし、心の平静を回復させる」（富永 1996: 40）と説明している。また、文芸批評家のジャン・スタロバンスキーは「廃墟が美しくみえるためには、破壊がじゅうぶん昔のことであり、その正確な事情が忘れられていなければならない」（Starobinski 1994=1999: 190）と論じている。この18世紀西欧での廃墟趣味については別稿で詳しく論じた（木村 2007）。

産への登録運動も起こっている⁽¹¹⁾。それだけではなく、いわゆるメディア・ヒストリーの侵入の問題も挙げられる (Barthel 1996)。これは、アクセスしやすいメディア的な表象が現実を凌駕してしまう現象である。たとえば、『廃墟の歩き方』の著者である栗原亨は、ある少女が廃墟で「こころピユタみたーい！」と発言したことにも触れ、この「メディアによって植えつけられた借り物の記憶」こそが廃墟ブームの隠された秘密なのかもしれないと分析している (栗原 2003)。これは、いわば新しいタイプの「観光のまなざし」と捉えることも可能だろう。このように、たとえ文化遺産という枠組みのなかでなくとも、現代社会においてモノが喚起する記憶は意志的記憶として切り詰められてしまう危険に常にさらされているのである。

4 現代社会における無意志的記憶——モノが提示する可能性

以上の議論を総合した上で、モノとしての文化遺産が持つ「説得力」を、無意志的記憶という概念によって説明することができるだろう。とはいえ、いざ実践の場においてこの無意志的記憶という概念を応用しようというとき、大きな問題に突き当たる。それは、この無意志的記憶は主体の意図によって能動的に喚起できるものではないため、それを現実の社会的場面から純粋な形で抽出したり、意図的に操作したりできないということである。

『記憶の場』の末尾で、ノラは記憶の温床は無限に拡大できるものではなく、やがて記憶の再構成が完了すれば、この現在のような強迫観念的な記憶の探求は終わるだろうと結論している (Nora 1984b=2002: 470)。だがそれは本当だろうか。たしかに第3章でみたように、フロイトもまた、人間の知覚システムにおいては、同時に意識化できる記憶の範囲は限られていると考えている。皮肉なことに、ノラ自身が「記憶の物質化」と呼んだ手続きによって、記憶の温床はむしろ拡大され続けており、これによって、記憶の意識化の過程は人間の能力を超え、さらにその保存に関しては近代社会における博物館・文化遺産といった制度の発達を下支えしてきたのである。また、近年では電子メディアの発達によって情報として記憶を大量に保存することも可能となった。

ここで問題なのは、多くの「記憶痕跡」が文化遺産化によって社会的に意味づけられ、意志的記憶の完成度が高まるほど、そこで語られていない無意志的記憶という残余が保存されなければならないという強迫観念が強まっていくということである。無意志的記憶が

⁽¹¹⁾ 「地域の産業遺産、世界遺産登録支援へ 経産省」(朝日新聞2006年08月21日朝刊)。

意志的記憶の不在としてのみ認識されることによって奇妙な喪失感を覚えた人々は、再び疎外された記憶に新たな社会的な意味づけを行い、またそのために、記憶をモノに定着させ、秩序づけ、保存しようとする。これが文化遺産化へのとどまることを知らない欲望となって現れるのである。

そして、この容易に意志的記憶化することのできない記憶の最たるものが、戦争や災害による死者に関する記憶である。これをモノを通して保存するための一つの方法としては、たとえば日本の原爆ドームや旧東ドイツ・ドレスデンの聖母マリア教会⁽¹²⁾のように、出来事に直接関わるモノ（廃墟）をそのまま保存することが挙げられる。しかし、このような剥き出しのモノは、喪失の記憶を喚起させるにはあまりに生々し過ぎると感じられる。そこで、その無意志的記憶は「戦争という悲劇」、「国家のための犠牲」といった社会的な物語＝意志的記憶に置き換えられることになる。そのための装置が、博物館のような形態をとったメモリアルなのである。

だがジェームズ・ヤングが指摘するように、そもそもこうしたメモリアルを作ること自体が、実は「安易な贖罪や癒し」を提供し、「記憶の場所をずらしているだけ」であるという批判も存在する（Young 2000: 96）。もっとも、整然と構成されたメモリアルが衝撃的な出来事の体験を物語＝意志的記憶化することによって緩和するという側面は一概に否定されるべきではないが、このような意志的記憶化によって逆説的に無意志的記憶が保存されていないという感覚が生じたり、それを（結局は構成されたものにすぎない）物語に過度に依存してしまうという一面も指摘することができるのである。

だがそれでもなお、我々は何かを記憶するときにモノに頼らなければならない。そこで、ここでは、極力構成的でない仕方で無意志的記憶を提示する一つの可能性として、美術家クリスチャン・ボルタンスキーの試みを参照しておきたい。彼は駅の何千という忘れ物を配列した作品や、膨大な古着を一箇所に集めた作品など、「遺物」を素材とした作品を数多く制作している。2003年『第二回大地の芸術祭 越後妻有トリエンナーレ2003』に出品された、過疎の村である松之山町の廃校を舞台とした『夏の旅』という作品はまさにこうした遺物へのまなざしの延長線上にある。

ボルタンスキーの作品群は実際に喪失の起こった場所である廃墟や、かつては持ち主がいたが今は忘れ去られてしまったモノとしての逸失物を素材とすることで、構成された「作品」の世界に属すると同時に、今はなき元の持ち主たちの世界にも属している。彼は

⁽¹²⁾ 聖母マリア教会は連合軍による爆撃を受けるが、「共産主義者の政府当局はこの廃墟を「資本主義者たちの戦争挑発」を思い出すよすがとして、現状のまま保存することに決めた」（Woodward 2001=2004: 309）。（だがベルリンの壁崩壊後、2004年には外部が再建された。）

これらを物語化せずに、むき出しのモノを現前させるといういささか暴力的な手法を取ることによって主体に受動性を要求し、そこに無意志的記憶が喚起される余地に賭けるのである。

おわりに——記憶のダイナミクス

今日、文化遺産において、モノが喚起しうる無意志的記憶は絶えず意志的記憶として再構成されつつある。それに対して、本稿ではモノ自体が保存されていることによって、主体の意図によって再構成されうる意志的記憶には収まり切らない、印象や感情としての記憶、言語化することのできない無意志的記憶について論じる可能性を提示した。だがこの無意志的記憶だけを独立して論じたり、ましてやそれを意図的に操作したりすることがいかに困難であるかはこれまでみてきた通りである。文化遺産と向き合うときに我々に喚起される〈語りえぬもの〉を表面的な解釈や構成によって「語ってしまう」のでもなく、抑圧してしまうのでもなく、無意志的記憶の可能性によって過去の出来事の重みを受けとめるために、我々に残されている余地は僅かしかない。それは、「記憶痕跡」としてのモノの証言力を引き出すために主体が受動的であること、それによって引き出された無意志的記憶の衝撃によって意志的記憶を破壊／再構成する契機をつくりだすことなのである。

引用・参考文献

- Barthel, Diane L., 1996, *Historic Preservation: Collective Memory and Historical Identity*, Rutgers University Press
- Benjamin, Walter, 1939, *Über einige Motive bei Baudelaire* (=1995, 浅井健二郎編訳・久保哲司訳「ボードレールにおけるいくつかのモチーフについて」【ベンヤミン・コレクション1 近代の意味】筑摩書房)
- _____, 1983, *Das Passagen-Werk* (= [1993] 2003, 今村仁司・三島憲一他訳【パサージュ論】第1巻, 岩波書店)
- Bergson, Henri, 1896, *Matière et mémoire* (=1936, 高橋里美訳【物質と記憶】岩波書店)
- Durkheim, Emile, 1898, "Représentations individuelles et représentations collective", *Revue de métaphysique et de morale*, 6 (=1985, 佐々木交賢訳「個人表象と集合表象」【社会学と哲学】恒星社厚生閣)
- Edensor, Tim, 2005, *Industrial Ruins: Space, Aesthetics and Materiality*, Berg Pub Ltd
- Freud, Sigmund, 1920, *Jenseits des Lustprinzips* (=1996, 中山元訳「快感原則の彼岸」竹田青嗣編【自我論集】筑摩書房)
- Halbwachs, Maurice, 1925, *Les cadres sociaux de la mémoire*, F. Alcan
- _____, 1950, *La mémoire collective* (=1989, 小関藤一郎訳【集合的記憶】行路社)
- Hewison, Robert, 1987, *The Heritage Industry: Britain in a Climate of Decline*, Methuen
- 今井信雄, 2002, 「阪神大震災の「記憶」に関する社会学的考察——被災地につくられたモニュメントを事例として」【ソシオロジ】47(2): 89-104

- 片桐雅隆, 2003, 『過去と記憶の社会学——自己論からの展開』世界思想社
- 木村至聖, 2007 (印刷中), 「文化遺産イデオロギーの批判的検討——近代西欧の廃墟へのまなざしを手にかりに」『ソシオロジ』51 (3): 掲載ページ未定
- 小林伸一郎, 1998, 『廃墟遊戯』メディアファクトリー
- , 2001, 『廃墟漂流』マガジンハウス
- 栗原亨, 2002, 『廃墟の歩き方 探索篇』イーストプレス
- , 2003, 『廃墟の歩き方〈2〉潜入篇』イーストプレス
- Lidchi, Henrietta, 1997, “The Poetics of Exhibiting Other Cultures,” Stuart Hall ed., *Representation: Cultural Representations and Signifying Practices*, Sage Pubns
- 松浦雄介, 2005, 『記憶の不確定性——社会的探求』東信堂
- 中田薫, 2002, 『廃墟探訪』二見書房
- , 2005, 『廃墟本 The Ruins Book』ミリオン出版
- Nora, Pierre, 1984a, “Entre mémoire et histoire: La problématique des lieux,” Pierre Nora dir., 1984, *Les lieux de mémoire* (=2002, 長井伸仁訳「序論 記憶と歴史のはざまに」谷川稔監訳「記憶の場——フランス国民意識の文化=社会史 第1巻 対立」岩波書店)
- , 1984b, “L’ère de la commémoration,” Pierre Nora dir., 1984, *Les lieux de mémoire* (=2002, 工藤光一訳「コモモレーションの時代」谷川稔監訳「記憶の場——フランス国民意識の文化=社会史 第3巻 模索」岩波書店)
- 荻野昌弘, 2002, 「文化遺産への社会的アプローチ」荻野昌弘編『文化遺産の社会学——ルーヴル美術館から原爆ドームまで』新曜社
- 岡真理, 2000, 『記憶／物語』岩波書店
- Olick, Jeffrey K. & Joyce Robbins, 1998, “Social Memory Studies: From ‘Collective Memory’ to the Historical Sociology of Mnemonic Practices,” *Annual Review of Sociology* 24: 105-40
- 小関隆, 1999, 「コモモレーションの文化史のために」阿部安成他編『記憶のかたち——コモモレーションの文化史』柏書房
- Starobinski, Jean, 1994, *L’invention de la liberté, 1700-1789* (=1999, 小西嘉幸訳『自由の創出——十八世紀の芸術と思想』白水社)
- 高橋哲哉, 1995, 『記憶のエチカ』岩波書店
- 富永茂樹, 1996, 『都市の憂鬱——感情の社会学のために』新曜社
- 内田隆三, 2002, 『国土論』筑摩書房
- Urry, John, 1990, *The Tourist Gaze: Leisure and Travel in Contemporary Societies* (=1995, 加太宏邦訳『観光のまなざし——現代社会におけるレジャーと旅行』法政大学出版局)
- Vergara, Camilo José, 1999, *American Ruins*, The Monacelli Press
- Woodward, Christopher, 2001, *In Ruins* (=2003, 森夏樹訳『廃墟論』青土社)
- Young, James E., 2000, *At Memory’s Edge: After-Images of the Holocaust in Contemporary Art and Architecture*, Yale University Press
- 湯沢英彦, 2004, 『クリスチャン・ボルタンスキー——死者のモニュメント』水声社

(きむら しせい・博士後期課程)

The Dynamic Relation between Two Kinds of Memories in Cultural Heritage Preservation: Reconsidering the Sociology of Memory

Shisei KIMURA

As it is often said, we can keep the memory of the past alive by preserving cultural heritages. However, there are two kinds of memories. One is voluntarily constructed, while the other one is involuntarily recalled. Research in the sociology of memory so far has given little attention to the latter, while focusing on the former.

The present article aims at throwing light upon the latter kind of memory (*la mémoire involontaire*). It is necessary to distinguish the difference between these two kinds of memories when we discuss cultural heritage preservation.

This paper first reviews the sociology of memory represented by Maurice Halbwachs' study of "collective memory". Halbwachs laid the basis of the sociology of memory, but he limited the debate to "constructed" memory, dismissing the problem of *la mémoire involontaire* as just an abstract image. Therefore, this paper attempts to reconsider the latter by referring to Walter Benjamin's discussion of memory and experience in modern society. Secondly, by taking Japan as a case study, I will show how *la mémoire involontaire* relates to material things that arouse public interest in ruined buildings in recent times. Finally, I will point out the significance of the dynamic relation between these two types of memory in cultural heritage preservation.